

# 4

## 小松 洋介氏 (特定非営利活動法人アスヘノキボウ 代表理事) 宮城県 女川町 まちづくり・ひとづくりで過疎化を止める

### Point ▶ 取組のポイント

#### [ヒト]

被災地への  
強まる想い

#### [着眼点]

最終目標は世界の  
過疎地への支援

#### [連携・協働]

中核となる  
3つのプログラム

#### [持続性]

都市から地方へ  
人の流れをつくる

DATA

### Area ▶ エリア

宮城県女川町

### Player ▶ 取組主体

小松洋介氏

### Project ▶ 取組の内容

まちづくり、創業・経営支援、  
移住施策、人材育成などに関わる活動

### Profile ▶ 人物紹介

小松洋介 (こまつ ようすけ)

宮城県仙台市生まれ。株式会社リクルートで情報誌の広告営業、リーダー業務に携わったが、震災後に退職。退職後、宮城県内すべての行政、各種団体や企業、住民にとって必要な支援は何か、ヒアリングを続ける。2011年10月女川町と出会い、2011年12月、民間団体「女川町復興連絡協議会」内の戦略室に入室。2013年4月、特定非営利活動法人アスヘノキボウを設立、代表理事に就任した。



世界中の過疎地を  
支援していきたい!



① 「女川フューチャーセンター Camass」  
② トレーラーハウス宿泊村「El Faro」  
③ アスヘノキボウのメンバー

#### [ヒト]

## 被災地への 強まる想い

震災前、宮城県女川町は人口1万人ほどの町だった。90年ほど前、水産業に適した豊かな土壌を求め、外部から人が集まり、大きくなった町だ。基幹産業は水産業、原発の町でもあった。

女川町は震災によって甚大な被害を受けた。家屋の約7割が失われ、死者・行方不明者は人口の1割に迫る。1,000年に一度の津波、そして現在1,000年に一度のまちづくりに取り組んでいる。特定非営利活動法人アスヘノキボウ(以下、アスヘノキボウ)代表理事の小松

洋介さんは、行政・民間・非営利の3つの領域をつないで連携し、地域の課題解決を推進する「トライセクターリーダー」として、女川の復興を牽引する。

小松さんは仙台市の出身で、もともと女川とは縁もゆかりもなかった。大学卒業後、リクルート(現・リクルートホールディングス)に入社。最初の配属先は仙台のオフィスで、新人営業マンとして宮城県沿岸部の松島から気仙沼まで毎日のように通うようになった。

「震災の時はチームリーダーとして札幌にいましたが、テレビをつけると僕の原点だった場所が、次々と津波に飲まれていきました。言葉では言い表せないほどの衝撃を受けました」(小松さん)

震災2日後にはボランティアとして宮

震災によって、甚大な被害に見舞われた宮城県女川町。  
 一般家屋の約7割が全半壊、死者、行方不明者は人口の1割近い827名。  
 その女川でまちづくり、ひとづくりに取り組むNPO法人のひとつが、  
 小松洋介さんの立ち上げた特定非営利活動法人アスヘノキボウである。

城県へ入り、それから半年間、週末は必ず仙台へ戻った。行けば行くほど被災地への想いは強くなる。小松さんはずいぶん、会社を辞める決意をする。

「生活の不安は、もちろんありました。仙台にUターンして、仕事をしながら被災地とかかわるという選択肢も考えました。いろいろ悩みましたが僕は当時29歳、20代の最後だし、思い切ってやってみよう、と決めました」(小松さん)

**[着眼点]**

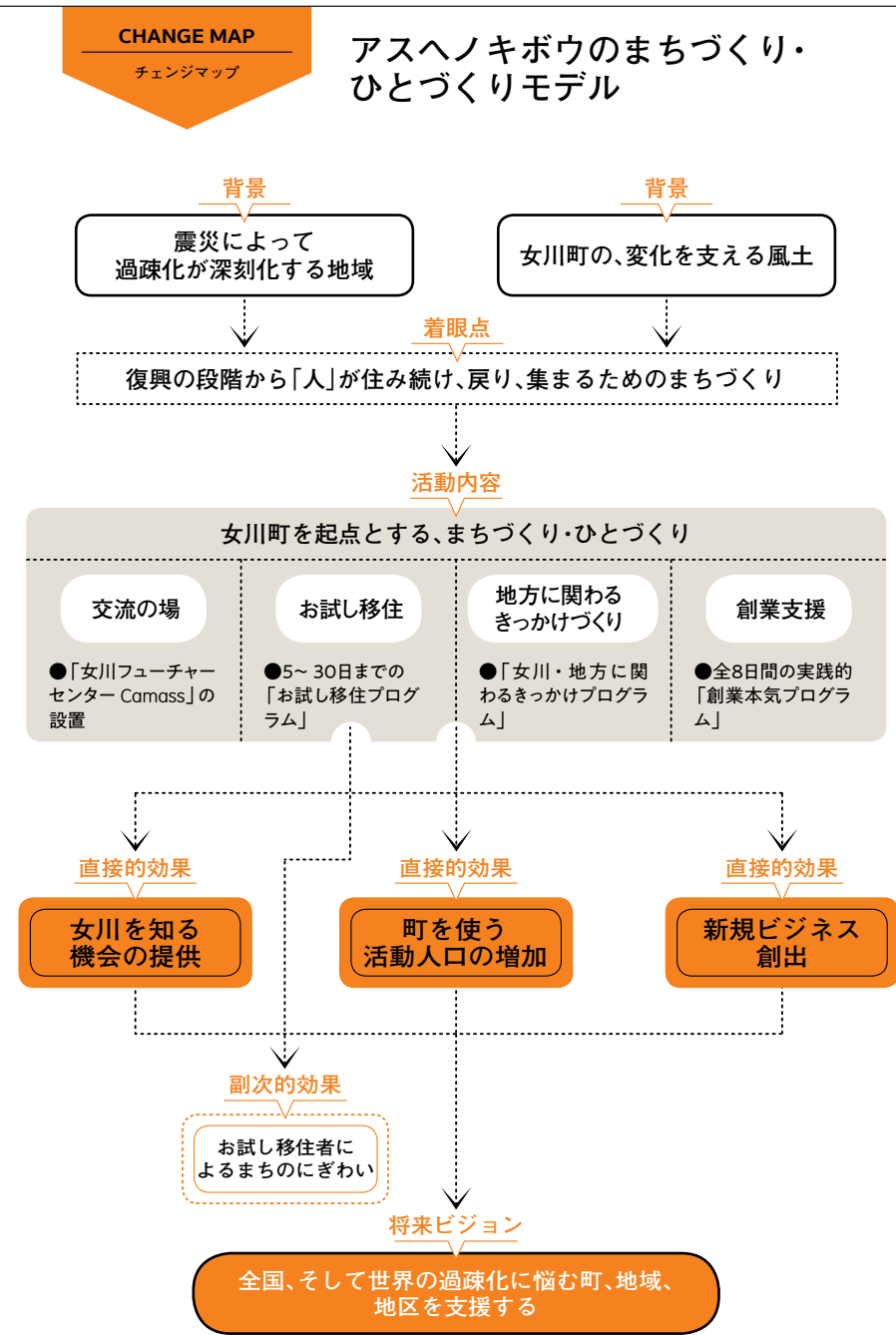
# 最終目標は 世界の過疎地への支援

小松さんはリクルート時代、「課題は現場に落ちている、とにかく現場に行け」と、教えられてきた。被災地でもまず現場で課題を拾うことを考え、宮城県内のすべての自治体、企業や団体、住民のもとを訪ね歩いた。3カ月間、ひとつのまちに10回以上は足を運び、必要な支援は何か、地元の人々の話を傾けた。その活動ぶりが認められ、女川町の商工会から声がかかった。

「復興のため一緒に活動しないかと、女川の人たちに言っていただいたんです。被害が大きかっただけに女川の人たちは、いまずぐに動くという意志が強かった。行政だけでなく民間にもまちづくりをするという気概があって、行政や議会と連携して取り組んでいました。その中心が民間団体の女川町復興連絡協議会で、僕はその戦略室に所属することになりました」

こうして小松さんは女川で活動することを決め、女川で復興提言書の作成や再建・起業支援に携わるようになった。

当時、小松さんは、トレーラーハウスを活用した宿泊施設の企画を温めていた。ボランティアや復興作業員のためにも、町に人を増やし消費を拡大するためにも、宿泊施設は必要だ。しかし被災地の旅館やホテルは、ほとんどが休



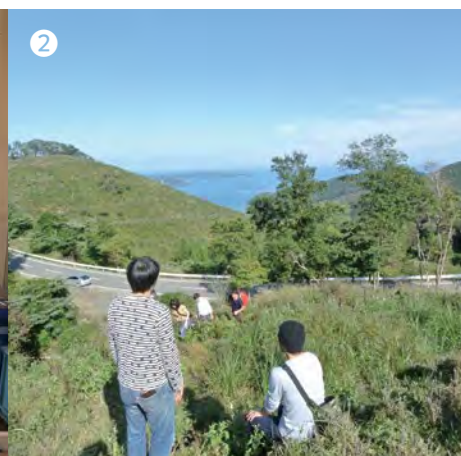
業状態だった。車両扱いのトレーラーハウスなら、建築基準法上の制限を受けない。被災地に設置しやすいし、撤去が必要な時がきても移転が可能だ。

女川町もまた、宿泊施設の早期設置を必要としていた。小松さんは女川町の旅館組合とともに、トレーラーハウス宿泊施設の開業を支援した。開業に向けて一緒に動いたのは、両親と実家の旅館「奈々美や」を失った佐々木里子さんをはじめ、女川町で被災した4つの旅

館だった。2012年12月、4つの旅館で「女川町宿泊村協同組合」を設立、佐々木さんが理事長となってトレーラーハウス宿泊村「エル フアロ El Faro」が清水地区(現在はJR女川駅前に移転)にオープンした。

3カ月後の2013年3月、女川町復興連絡協議会戦略室を法人化するかたちで、アスヘノキボウが設立された。小松さんは、その代表理事となる。法人化の目的は、何より被災地の復興だ。しかし被災地と呼ばれる地区は震災前か

- ① 「お試し移住プログラム」の様子
- ② 「女川、地方にかかわるプログラム」の様子
- ③④ 「創業本気プログラム」の様子



ら過疎化が進んでいた地域がほとんどだ。震災によって、過疎化はさらに深刻化した。町並みが復活しても、肝心の「人」がいなければ意味がない。復興の段階から「人」が住み続け、戻り、集まるためのまちづくり。そのための努力が必要だった。まちづくりと同時にひとづくりに成功すれば根幹産業が活性化し、地方が活性化するのではないか。小松さんとアスヘノキボウの最終目標は、全国、世界の過疎化に悩む町、地域、地区への支援だった。

**【連携・協働】**

## 中核となる3つのプロジェクト

2015年3月、小松さんは「女川であらゆる人がつながる場となるように」と、「女川フューチャーセンターCamass」

(以下、Camass)という交流施設を開いた。当時の女川町では、内外の交流は各組織のリーダーが個別に対応するしかなかったからだ。Camassは女川弁の「かます=かき混ぜる」と、英単語の「Mass=たくさんの・大勢で」を組み合わせた造語だ。

そしてCamassのオープンを機に小松さんたちは、準備していたアイデアを次々と実現させていく。それはアスヘノキボウの3つのプログラムとして、現在も活動の中核となっている。

3つのプログラムの1つ目は、「お試し移住プログラム」。5日から30日間、自由に滞在期間を選択し、女川町に滞在してもらう。

宿泊費は無料。男女それぞれのシェアハウスに住み、滞在中は何をしてもよい。参加条件は事前に面談を受け、15,000円のオリエンテーション費を払って町の歴史や復興の現状などを学ぶこ

と。代々の参加者が書き継いでいるお試し移住者リレーブログと、最終日に滞在レポートを執筆してもらうことになっている。

2つ目は「女川、地方にかかわるきっかけプログラム」。具体的には、女川に2泊3日(金曜21時~日曜16時)滞在してもらい、女川のまちづくりや各産業の魅力や課題を学んでもらうプログラムだ。町内外の起業家や経営者、移住者などと交流し、参加者に地方との関わり方を考えてもらう。

「地方に興味があっても、何をすればよいかわからない人はたくさんいます。移住しなくても、さまざまな関わり方があることを伝える場になればと、このプログラムを始めました」(小松さん)

震災後の女川町には、スペインタイル工房や石けん工房、グラフィティアート、クラフトビール店、ギター工房といったビジネスが次々に生まれている。オ



Data ▶ 本事例の問合せ先

アスヘノキボウ  
所在地：宮城県牡鹿郡女川町  
HP: <https://www.asuenokibou.jp>  
主な事業内容：まちづくり計画作成支援/  
事業再建・立ち上げ支援/事業経営支援など

Area ▶ エリア

宮城県女川町

オープンしたばかりの新しい店や工房、魚市場などを見学したり、山歩きを体験したりといったフィールドワークを通して、自分と女川・地域の関わり方を考えることが目的だ。

そして、3つ目の「創業本気プログラム」は2日間×4回、全8日間にわたって行われる。「なぜ、どんな起業をしたのか」という参加者の思いを整理し、それぞれに適したビジネスモデルを練る。

それを支えるのが、女川町商工会の職員や行政職員、さらに実際に起業した現役経営者たち。彼らが定期的に講師陣に加わり、創業に至るまでの想いや、具体的にどう実現したか、マンツーマンでレクチャーする。そして8日目は、各参加者が自身のビジネスプランのプレゼンテーションをして終了となる。

「3つのプログラムは、女川での活動人口を増やすことが目的です。活動人口とは町民に限らず、町を使う人の数のこと。日本の人口が減るなかで、女川だけを増やすのは簡単なことではない。いくら移住や定住を叫んでも町に魅力がなければ実現しませんから、この町を使う人が増えて、結果として女川で暮らしたい人が増えればと思っています」(小松さん)

小松さんたちは震災以降、女川での起業支援に取り組んできた。さらに広げて、全国での起業支援プログラムにしていけば、起業の準備をした町が女川になる。「女川を起業の故郷にする」のが、小松さんの目標である。

**[持続性]**

# 都 市から地方へ 人の流れをつくる

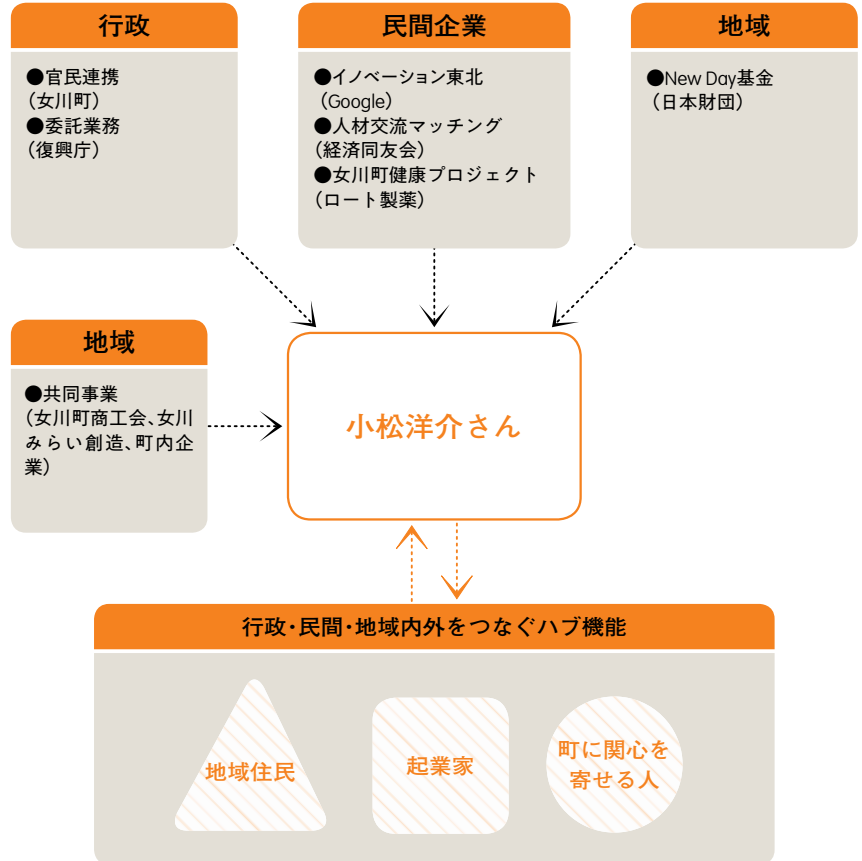
お試し移住の滞在中に別のプログラムを受ける人が増えるなど、「3つのプログラムが有機的にまわるようになりました」と、小松さんは話す。

「例えばお試し移住はおかげさまで参

**COLLECTIVE IMPACT**

コレクティブ・インパクト

## 女川の活動人口を増やす まちづくりの連携・協働の図



加者が増えて、滞在中に地元の商店でアルバイトをする人も出てきました。長期雇用が難しい店にとって、お試し移住の人たちに期間中だけ手伝ってもらえるのはありがたい。さらに飲食店を利用してもらえれば、町の人との交流もでき、経済的な貢献にもなります」と小松さん。

課題もあって、プログラムは今後も継続させていかなければならない。

現在は、女川町から委託を受けているが、「参加者の皆さんにより満足していただくために、このプログラムをどう成長・発展させていくかなどを、日々、役場の方と議論しています」(小松さん)

小松さんを始めとする内外の人たちが創造的なアイデアを出し合い、官民が密接に連携してアイデアを実現することで、女川町はまちづくり、ひとづくりのかたちを作り上げつつある。

しかしそんな女川町ですら、現在の人口は7,000人弱、減少は止まっていない。

「課題はいくらでもあります。それでも皆で協力すれば、乗り越えられない壁はないと信じています」(小松さん)

小松さんは2017年、アメリカでの事例をもとに、「Venture For Japan」という新しいプログラムを立ち上げた。これは優秀な学生を地方の中小企業へ、2年間限定で経営ポスト(社長の右腕や経営幹部)として人材紹介しようというもの。

「地方の中小企業で働く」ことが、卒業後の学生の当たり前の選択肢となることを目指した取組だ。

まちづくり、ひとづくりを成功させ、日本そして世界の過疎化に悩む町や地域を支援する、小松さんの挑戦はこれからも続く。